

H. Toyokuni: Elementa Linguae Latinae Botanicae (1)

「植物国際命名規約」では、植物の新しい分類群 (taxa) 命名の際には、バクテリアを除いて、ラテン語の記載文が無いと正式に発表されたとは認められないことになっている。そのため、世界中どここの国から発表される新種や新変種など、新分類群には必ずラテン語の記載文がついている。だから本格的に植物分類学を勉強しようと志す者にとって、原記載に当らなければならなくなった時、先ずつき当るのが、ラテン語という関門である。また、植物調査中に未だ学名がつけられていない種、すなわち新種を発見し、それに自分で学名をつけて、学会に正式に発表する場合にも、やはりラテン語という関門につき当る。しかも、古典文学を学ぶためのラテン語の入門書はあっても、植物学のためのラテン語入門書は、ほとんど無く、今手に入るものは、英国の、W.T. Stearn 博士の「Botanical Latin」位しかないし、日本語の本となれば、朝比奈泰彦・清水藤太郎両博士の「植物・薬物学名典範」しかないが、戦前の出版なので、絶版のためほとんど入手不可能である。特に近年、植物分類学に興味を持たれる学生の会員が、本会としては増えつつあるように思えるので、ごく限られた紙面ではあるが、植物分類学のためのラテン語を学ばれる方の手助けになるよう、本稿を草することにした。

1. ラテン語のアルファベット

ラテン語のアルファベット (Litterae latinae) は、23文字で、外来語以外 W の文字は無い。また I は、母音にも子音にも使われ、V も、母音にも子音にも使われていた。後に、I の子音は J、V の母音は U で表わすようになった。したがって、日本は、古いラテン語では「Iaponia」であったが、後に、「Japonia」になった。以下、アルファベットの大文字、小文字、標準的読み方、および音価を示す。

大文字	小文字	読み方	音価
A	a	ā	a, a:
B	b	bē	b
C	c	kē	k
D	d	dē	d

E	e	ē	ε, e:
F	f	ef	f
G	g	gē	ġ
H	h	hā	h
I (J)	i (j)	ī	i, i: j
K	k	kā	k
L	l	el	l
M	m	em	m
N	n	en	n
O	o	ō	o, o:
P	p	pē	p
Q	q	kū	k (w)
R	r	er	r
S	s	es	s
T	t	tē	t
V (U)	v (u)	ū	u, u: w
X	x	ix	ks
Y	y	y	y, y:
Z	z	zēta	z

注) K, Y, Z の 3 文字は希にしか使用されない。特に、ギリシア語系の言葉に使用される。

2. ラテン語の発音

ラテン語は死語であり、殆んど発音する必要は無いが、外国人との会話中に学名を入れる場合には、なるべく正式な発音を知っていた方が便利である。尤も、米国人は、英語式に発音する人が多いが。一応、ローマ字の読み方に近いと考えてよい。但し、cha は ka, chi は ki と発音する。

3. ラテン語の品詞

ラテン語の品詞 (partes orationis) は英語と同じく、8 品詞である。但し、数詞を特に形容詞から区別すれば、9 品詞となる。植物学的な記載文を読み書きする場合には、名詞、形容詞 (含数詞)、若干の代名詞、前置詞、接続詞と、ごく少量の動詞を知っていれば充分である。

4. 名 詞

ラテン語の名詞には、三つの文法上の性、二つの数、七つの格がある。

(1) 三つの性

男性 (m.), 女性 (f.), 中性 (n.)

この性は天然の性にしたがう場合もあるが、ドイツ語と同じく文法上の性であり、個々の単語につき記憶しなければならないが、語尾の形で判断できるものもある。

(2) 二つの数

単数 (sing. または s.), 複数 (pl.)

英語やドイツ語と同様な考え方でよい。

(3) 七つの格

主格 (Nom.) ……は, ……が [英語の主格]

属格 (Gen.) ……の [英語の所有格]

与格 (Dat.) ……に [英語の間接目的格]

対格 (Acc.) ……を [英語の直接目的格]

奪格 (Abl.) ……で

呼格 (Voc.) ……よ

場所格 (Loc.) ……において

ラテン語には、上に示すように、格は七つあるが場所格は、わずかな数の地名などに残っているだけである。これらの格の中で、植物の記載に普通使われるのは、主格、属格、奪格で、少し込み入った記載では、与格、対格も使われる。

(4) 格変化

ラテン語の名詞の殆んどは、上述の格によって、その語の語尾が変化する。それを転尾 (declinatio) と言う。転尾は、格変とも、変化とも言い、第1種転尾から、第5種転尾までである。次にその例を示す。

第1種 転尾

lamina, f. 「葉身」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	lamin-a	lamin-a
Gen.	lamin-ae	lamin-arum
Dat.	lamin-ae	lamin-is
Acc.	lamin-am	lamin-as
Abl.	lamin-a	lamin-is

第1種転尾の名詞は、単数主格で—a, 属格で—ae, 複数主格で—ae, 複数属格で—arum という語尾で終る。この変化の名詞は殆んどすべて女性名詞であるが、自然の性にしたがって男性名詞も若干ある。この群には、次のような名詞がある。ala (翼), anatomia (解剖学), capsula (蒴果), corolla (花冠), crista (稜), cuticula (クチクラ), fimbria

(ふさ), glandula (腺), insula (島), membrana (膜), mycologia (菌学), papilla (乳頭毛), placenta (胎座), plica (副花冠), prominentia (隆起), spina (棘), squama (鱗片), zona (帯), 以上女性名詞, alpicola (高山の住人), calcicola (石灰岩の住人), 以上男性名詞

第2種 転尾

ramus, m. 「枝」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	ram - us	ram - i
Gen.	ram - i	ram - orum
Dat.	ram - o	ram - is
Acc.	ram - um	ram - os
Abl.	ram - o	ram - is

第2種 転尾

labellum, n. 「唇弁」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	labell - um	labell - a
Gen.	labell - i	labell - orum
Dat.	labell - o	labell - is
Acc.	labell - um	labell - a
Abl.	labell - o	labell - is

第2種転尾の名詞は、単数主格が—us, 複数主格が—i のものと、単数主格が—um, 複数主格が—a のものとがある。前者は、ほとんど男性名詞であるが、樹木の名は大部分女性名詞である。後者は、かならず中性名詞である。前者の例としては、nervus (脉), annulus (環帯), bulbus (球根), folliculus (袋果), lobus (裂片), lobulus (小裂片), nodus (節), nucleus (核), pedunculus (花梗), pedicellus (小花梗), porus (孔), scapus (花茎), utriculus (胞果), 以上男性名詞, ficus (イチジク), pinus (マツ), 以上女性名詞, またごく希に中性名詞もある。但し複数主格は—a である。後者の主格—um の例としては、bacterium (バクテリア), capitulum (頭状花序), folium (葉), ovarium (子房), pigmentum (色素), segmentum (断片), stratum (層), tepalum (花被片), perianthium (花

被), vexillum(旗弁) など。

第2種 転尾

phyton, n.「植物」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	phyt - on	phyt - a
Gen.	phyt - i	phyt - orum
Dat.	phyt - o	phyt - is
Acc.	phyt - on	phyt - a
Abl.	phyt - o	phyt - is

第2種転尾の中性名詞には、ギリシア語系のものもある。これは、主格語尾が-onで終わっているものである。上表の「植物」の他に、gametophyton(配偶体), organon(器官), skeleton(骨)なども同じ変化をする。

第2種 転尾

ager, m.「畑」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	ager	agr - i
Gen.	agr - i	agr - orum
Dat.	agr - o	agr - is
Acc.	agr - um	agr - os
Abl.	agr - o	agr - is

上表の男性名詞 ager(畑)は、第2種転尾であるが、主格が格語尾を持たない。liber(本)も同じ変化をする。

第3種 転尾

equator, m.「赤道」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	equator	equator-es
Gen.	equator-is	equator-um
Dat.	equator-i	equator-ibus
Acc.	equator-em	equator-es
Abl.	equator-e	equator-ibus

第3種 転尾

margo, m.「へり」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	marg-o	marg-ines
Gen.	marg-inis	marg-inum
Dat.	marg-ini	marg-inibus
Acc.	marg-inem	marg-ines
Abl.	marg-ine	marg-inibus

第3種 転尾

apex, m.「先端」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	ap - ex	ap - ices
Gen.	ap - icis	ap - icium
Dat.	ap - ici	ap - icibus
Acc.	ap - icem	ap - ices
Abl.	ap - ice	ap - icibus

ラテン語名詞の格変化の中で、最も複雑なのは、第3種転尾である。男性名詞を先ず3種挙げたが、複数属格(Gen.)が-umで終る名詞と-iumに終る名詞がある以外は、ほぼ共通の変化をする。

第3種 転尾

radix, f.「根」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	rad - ix	rad-ices
Gen.	rad - icis	rad-icium
Dat.	rad - ici	rad-icibus
Acc.	rad - icem	rad-ices
Abl.	rad - ice	rad-icibus

第3種 転尾

basis, f.「基部」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	bas-is	bas-es
Gen.	bas-eos (is)	bas-ium
Dat.	bas-i	bas-ibus
Acc.	bas-in (em)	bas-es
Abl.	bas-e (i)	bas-ibus

第3種転尾女性名詞で、記載文に必ず出てくる単語を2つ挙げて見たが、basis(基部)は、ギリシア語系の名詞なので、部分的に変化が2種類になっているが、どちらを使用してもよい。

第3種 転尾

animal, n.「動物」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	animal	animal - ia
Gen.	animal - is	animal - ium
Dat.	animal - i	animal - ibus
Acc.	animal	animal - ia
Abl.	animal - e	animal - ibus

第3種 転尾

stigma, n.「柱頭」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	stigma	stigma - ta
Gen.	stigma - tis	stigma - tum
Dat.	stigma - ti	stigma - tibus
Acc.	stigma	stigma - ta
Abl.	stigma - te	stigma - tibus

第3種転尾の中性名詞で、単数主格(Nom.)が、-ma で終わっている名詞は、上表のように特別な変化をする。この変化をする名詞には stoma(気孔)や systema(体系) などがある。

第4種 転尾

processus, m.「突起」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	process-us	process-us
Gen.	process-us	process-uum
Dat.	process- ^{ui} _(u)	process-ibus
Acc.	process-um	process-us
Abl.	process-u	process-ibus

第4種転尾の名詞は、植物の記載文には余り出て

はこないが、例に出した processus(突起)のように重要なものもある。これは男性名詞であるが、女性名詞の quercus(櫟)も同じ変化をする。

第4種 転尾

cornu, n.「角」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	corn - u	corn - ua
Gen.	corn - us	corn - uum
Dat.	corn - u	corn - ibus
Acc.	corn - u	corn - ua
Abl.	corn - u	corn - ibus

上表の「第4種転尾 cornu(角)」は、特別な変化をするので注意。

第5種 転尾

species, f.「種」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	speci - es	speci - es
Gen.	speci - ei	speci - erum
Dat.	speci - ei	speci - ebus
Acc.	speci - em	speci - es
Abl.	speci - e	speci - ebus

第5種転尾の名詞は、上表の species(種,種類), subspecies(亜種)などの女性名詞と、dies(日)の男性名詞(女性名詞として使う場合もある)を覚えておけばよいと思う。

以上で名詞の転尾 第1種から第5種まで、ざっと目を通した訳である。名詞だけでは、記載文が書けないので、次に形容詞に目を通すことにする。

5. 形容詞

形容詞も、名詞と同様に転尾(格変化)する。特にその形容詞によって修飾される名詞の性・格・数の支配を受けることを常に頭の中に入れておかなければならない。

但し、形容詞は、特殊なものを除いて、名詞の第1種転尾～第3種転尾と変化は、ほとんど同じである。したがって、両者を一緒に記憶するのも、学習法としては良策であろう。例えば、第1種転尾の名詞 lamina(葉身)に、parvus, -a, -um(小さい)と

いう形容詞をつけると、主格で *lamina parva*, 属格で *laminae parvae*, 与格は属格に同じ、対格は、*laminam parvam*, 奪格は *lamina parva* となる。複数の場合も名詞 *lamina* の変化と一致する。次表の *albus*, -a, -um (白い) も同様。

形容詞 第1種 転尾
albus, -a, -um 「白い」の変化

		m.	f.	n.
Sing.	Nom.	alb-us	alb-a	alb-um
	Gen.	alb-i	alb-ae	alb-i
	Dat.	alb-o	alb-ae	alb-o
	Acc.	alb-um	alb-am	alb-um
	Abl.	alb-o	alb-a	alb-o
Pl.	Nom.	alb-i	alb-ae	alb-a
	Gen.	alb-orum	alb-arum	alb-orum
	Dat.	alb-is	alb-is	alb-is
	Acc.	alb-os	alb-as	alb-a
	Abl.	alb-is	alb-is	alb-is

形容詞 第2種 転尾
persistens 「永存性の」の変化

		m.	f.	n.
Sing.	Nom.	persist-ens	persist-ens	
	Gen.	persist-entis	persist-entis	
	Dat.	persist-enti	persist-enti	
	Acc.	persist-entem	persist-ens	
	Abl.	persist-enti (e)	persist-enti (e)	
Pl.	Nom.	persist-entes	persist-entia	
	Gen.	persist-entium	persist-entium	
	Dat.	persist-entibus	persist-entibus	
	Acc.	persist-entes	persist-entia	
	Abl.	persist-entibus	persist-entibus	

形容詞 第2種 転尾
brevis, -e 「短かい」の変化

		m.	f.	n.
Sing.	Nom.	brev-is	brev-e	
	Gen.	brev-is	brev-is	
	Dat.	brev-i	brev-i	
	Acc.	brev-em	brev-e	
	Abl.	brev-(e)	brev-(e)	
Pl.	Nom.	brev-es	brev-ia	
	Gen.	brev-ium	brev-ium	
	Dat.	brev-ibus	brev-ibus	
	Acc.	brev-es	brev-ia	
	Abl.	brev-ibus	brev-ibus	

brevis, -e (短かい) という形容詞を第2種転尾の名詞 *folium*, n(葉) につけると、次のように変化する。
folium breve [主], *folii brevis* [属], *folio brevi* [与], *folium breve* [対], *folio brevi* [奪], 複数では, *folia brvia* [主], *foliorum brevium* [属], *foliis brevibus* [与], *folia brevia* [対], *foliis brevibus* [奪] となる。

6. 副詞

記載文によく出てくるものには, *interdum* (時々), *saepe* (しばしば), *plerumque* (たいがい), *non* (〜でない), *valde* (非常に), *vix* (ほとんど〜でない)

7. 前置詞

前置詞はよく使われるが、主なものは *a*, *ab* (〜から, 〜によって), *ad* (〜へ, 〜の方へ), *cum* (〜と共に), *in* (〜において, 〜の上で), *sine* (〜なしに), *pro* (〜のために), *de* (〜について) などあり、全て、ドイツ語同様、支配する格がある。*a*, *cum*, *sine*, *pro*, *de* は奪格 (Abl.) 支配, *ad* は対格 (Acc.) 支配である。*in* は奪格の時は「〜において」、対格の場合は運動の方向をあらわし「〜に向って」となる。

8. 動詞

動詞は余り使われないが、英語の *be* 動詞と、*have* 動詞に当るものは必要であるので、紹介する。
3人称単数 *est*, 複数 *sunt* (ある, 居る), 3人称単数 *habet*, 複数 *habent* (持つ)。

9. 実例

最後に少し実例を挙げて見よう。

Haec planta Gentianae nipponicae affinis, sed ab ea floribus albis diversa est.
「この植物はミヤマリンドウに近い、しかし、それからは、花が白いことで異なる」。この文の中で、*haec* は形容詞で「この」*planta*, *f.* は第1種転尾の名詞で「植物」*Gentianae nipponicae* は、ミヤマリンドウの学名の与格「ミヤマリンドウに」*affinis* は形容詞で「近い」、*sed* は、接続詞で、「しかし」*ab* は、前置詞で「〜から」*ea* は、代名詞で、「それ」ミヤマリンドウを受ける。*floribus albis* は、*flos albus* 「白い花」の複数奪格で、「白い花で」すなわち「花が白いので」の意。*diversa* は、「全く異なった」という形容詞で、最後の *est* は *be* 動詞である。

(続 く)